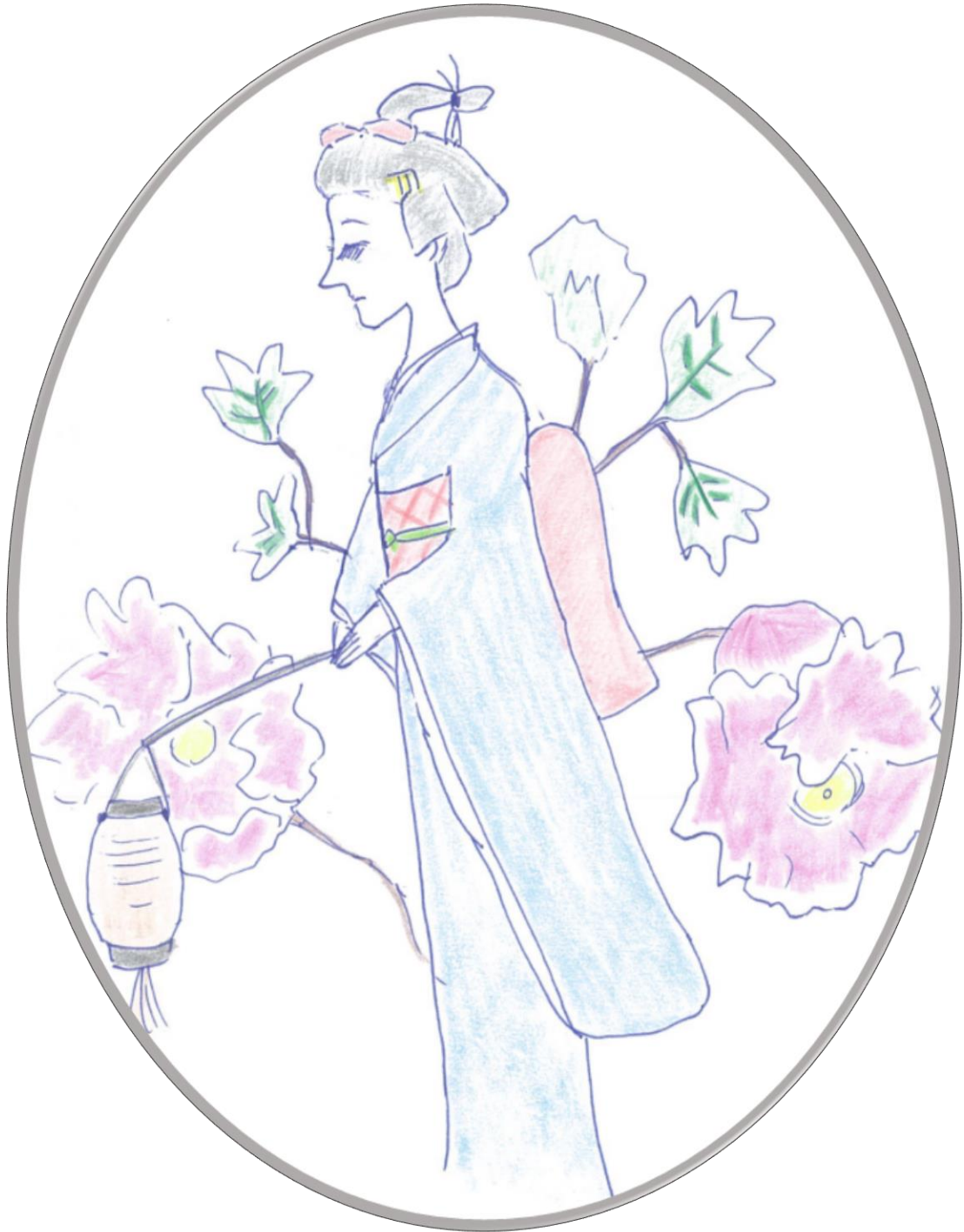


ぼ た ん ど う ろ う

牡丹灯笼



ぼたんどうろう
牡丹灯籠

むかし えどじだい はなし
昔むかし、江戸時代のこわいお話です。

はぎわらしんざぶろう かお よ さむらい おんな ひと しんざぶろう こい
萩原新三郎は、顔の良い侍でした。たくさんの女の人が、新三郎に恋をしまし
た。

なか つゆ むすめ
その中に、お露という娘がいまし
た。お露は、死ぬほど新三郎が好きでし
た。毎日、毎晩、新三郎のことばかり
かんが ほか
考えていました。他のことができなく
なっていました。だんだん、ごはんを
た
食べられなくなっていました。そし
て、さいご し
て、最後には、死んでしまいました。

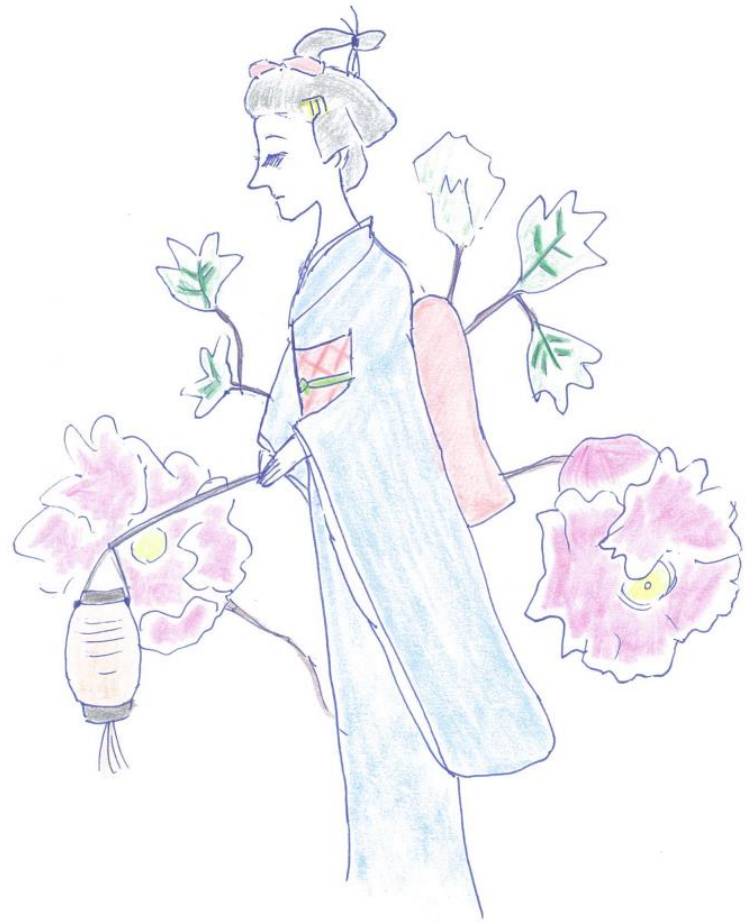
ぼん しんざぶろう つき
ある晩、新三郎は、月がきれいなの
み おんな ひと
で、見ていました。すると、女の人
しんざぶろう いえ まえ き
が、新三郎の家の前まで、やって来まし

わか おんな ひと しんざぶろう おんな ひと こい
た。若くて、きれいな女の人でした。新三郎は、その女の人に恋をしました。

なまえ なん
「おじょうさん、あなたの名前は何ですか。」

つゆ もう
「『お露』と申します。」

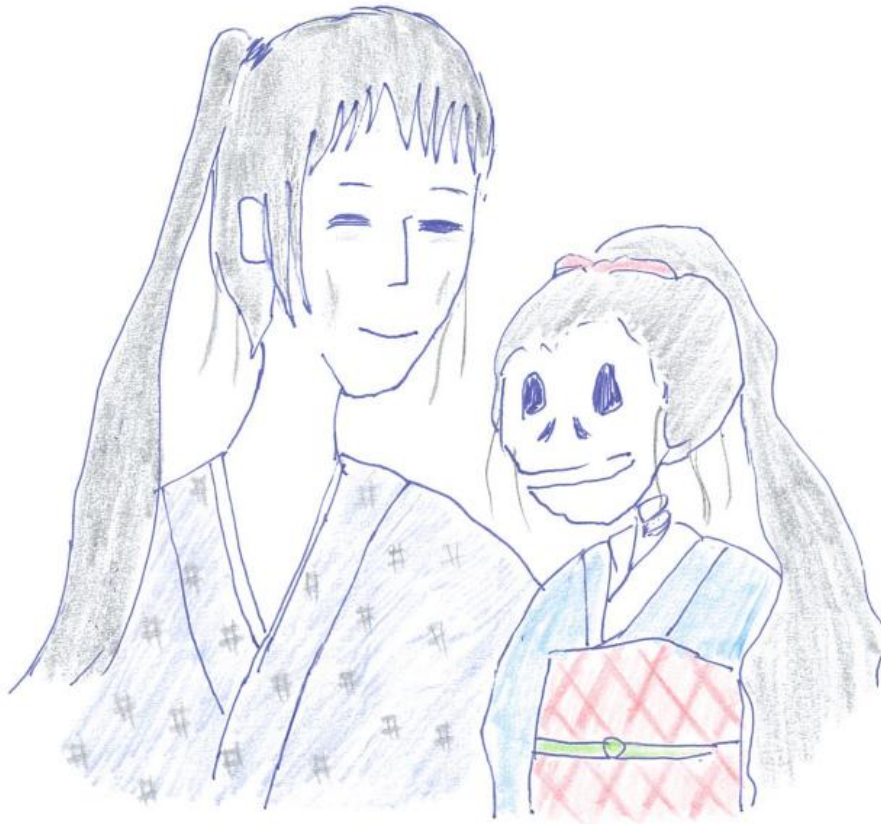
なまえ
「ああ、いい名前ですね。」



その晩から、^{ばん}新三郎と『^{しんざぶろう}お露』は、^{つゆ}恋人になりました。^{こいびと}

^{こい}恋をしている若者は、^{わかもの}幸せです。しかし、^{しあわ}新三郎は、^{しんざぶろう}幸せではありませんでした。^{しんざぶろう}新三郎は、^{かお}どんどんやせていきました。^{いろ}顔の色も悪くなりました。^{わる}おじいさんのようになってきました。

^{しんざぶろう}新三郎の家で、^{いえ}伴蔵という男が働いていました。^{ばんぞう}伴蔵は、「^{おとこ}どうして^{はたら}新三郎さんは、^{ばんぞう}どんどんやせてきたのだろう。^{しんざぶろう}ぜんぜん^{げんき}元気がない。^{びょうき}病気なんだろうか。」^{ふしぎ}と不思議に思っていました。そこで、^{おも}ある晩、^{ばん}新三郎が、^{しんざぶろう}恋人の『^{こいびと}お露』と会っているところを、^{つゆ}のぞいてみました。^あすると。。。



しんざぶろう よこ つゆ にんげん がいこつ
新三郎の横にいた『お露』は、人間ではありませんでした。骸骨でした。それで
つゆ し しんざぶろう あ き
す、『お露』はもう死んでいました。だから、新三郎に会いに来ていたのは、『お
つゆ ぼ し しんざぶろう す つゆ ぼ
露』のお化けだったのです。死んでも新三郎が好きだったので、『お露』は、お化
しんざぶろう あ き
けになって、新三郎に会いに来たのです。

つぎ ひ ぼんぞう まえ ぼんみ ぜんぶしんざぶろう い しんざぶろう おどろ
次の日、伴蔵は、前の晩見たことを、全部新三郎に言いました。新三郎は、驚き
こわ
ました。そして、怖くなりました。

わたし し つゆ ぼ わたし ころ
「このままでは、私は、すぐに死んでしまう。『お露』のお化けが、私を殺す
だろう！」



しんざぶろう りょうせき
新三郎は、どうしていいかわからなかったので良石と
ぼう そうだん りょうせき とくべつ かみ
いうお坊さんに相談しました。良石は、特別な紙をたく
さんくれました。そして、こういいました。「この紙に
かみ
は、こわいお化けから人間を守る力があります。この紙
いへ まわ は
を家の周りに、いっぱい貼りなさい。そうすれば、『お
つゆ ぼ いへ なか はい
露』のお化けは、あなたの家の中に入ることができませ
ん。」

しんざぶろう りょうせき かみ いへ まわ は
新三郎は、良石にもらったたくさんの紙を、家の周りに貼りました。すると、そ
ぼん つゆ ぼ しんざぶろう いへ なか はい
の晩から、『お露』のお化けは、新三郎の家の中に入ることができなくなりました。
た。



しかし、『お露』のお化けは、どうしても新三郎に会いたいと思いました。そこで、ある晩、仕事が終わって、新三郎の家を出てきた伴蔵の前に現れて、話しかけました。

「ひええええ～。お化けだ！」伴蔵は、怖くて大きな声をだしました。

「だいじょうぶ、あなたには何もしません。私は、新三郎さんの家に入りたいです。でも、あの紙があると、入ることができません。お願いします、あの紙を取ってください。」と『お露』のお化けは言いました。

「いやだ。あなたが、新三郎さんに会ったら、新三郎さんは、死んでしまう。」と伴蔵は答えました。

すると、『お露』のお化けは、こう言いました。

「あなたがあの紙を取ってくれるのなら、たくさんお金をあげましょう。」

ばんぞう こ とき かね はたら
伴蔵は、子どもの時から、お金がありませんでした。がんばって働きましたが、
かね かね せいかつ いや おも
まだお金がありませんでした。「もう、お金がない生活は嫌だ。」といつも思っ
ばんぞう かね おも つゆ
ていました。だから、伴蔵は、そのお金がほしいと思いました。そして、『お露』
かみ ぜんぶ やくそく
に、「あの紙を全部とってあげよう。」、と約束しました。

つぎ ひ ばんぞう しんざぶろう いえ まわ は かみ ぜんぶと ひ
次の日、伴蔵は、新三郎の家の周りに貼ってある紙を、全部取りました。その日
よる つゆ ぼ しんざぶろう あ き
の夜から、また『お露』のお化けが、新三郎に会いに来ました。

しんざぶろう つゆ ぼ まいばん あ し
新三郎は、『お露』のお化けに毎晚会ううちに、どんどんやせていき、ついに死
んでしまいました。

ばんぞう しあわ つゆ ぼ かね
伴蔵は、しばらくは幸せでした。『お露』のお化けにもらったお金があったから
です。

ばん ばんぞう さけ の かわ よこ みち ある かわ なか
ある晩、伴蔵は、お酒を飲んで、川の横の道を歩いていました。すると、川の中
なに で き おんな ひと しろ て て
から、ぬる〜と何かが出て来ました。それは、女の人の白い手でした。その手
ばんぞう あし ちから ばんぞう あし
は、伴蔵の足をつかみました。そして、ものすごい力で、伴蔵の足をひっぱりまし
た。



「わ~~~~、な、なんだ！助けてくれえ~~~~！」

伴蔵は、大声で叫びました。でも、誰も助けに来てくれませんでした。そして、伴蔵の体は、川の中にひっぱられて行きました。その晩から、伴蔵を見た人はいませんでした。（1011語、1285語のテキストカバー率 88.5%）

か　ひと　しっぴつしゃ　たはた　みつえ
書いた人／執筆者：田畑サンドーム光恵

ひと　しっぴつきょうりよくしゃ　もりしたさちこせんせい
てつだってくれた人／執筆協力者：森下幸子先生